

宗教の役割に関する意識の世代間比較

—ISSP2008 宗教意識調査を事例として—

○北海道大学 清水香基

1 問題関心

近年、我が国の宗教社会学研究においては、政教関係の視座から各国社会の宗教状況を考察するものや、宗教と公共空間との関係を論じた研究が刊行されはじめ、現代社会における宗教の役割を問おうという動向が見て取れる。こうした動向の背景には、各国におけるファンダメンタリズムの台頭や、宗教の政治参加の拡大についての指摘があり、こうした現象はしばし「ポスト世俗化」や「再聖化」といった言葉で表現されてきた。他方、ミクロ（個人）のレベルにおいては、高度に発展した社会では宗教に対する価値づけが低下するという、しばし世俗化と呼ばれる傾向も指摘されている。そうした宗教意識の変容は、「宗教の私化」「個人主義化」「パッチワーク宗教」といった用語で表現され、近代以後の宗教性を特徴づける主要なものとして捉えられてきた。以上をまとめるならば、現代社会における宗教変動の趨勢は、公領域における宗教のアピアランスの拡大（ポスト世俗化）と宗教の私化（世俗化）の2つの側面を有するものとして捉えることができる。

本報告の関心は、宗教の私化を経験した諸個人は、公領域における宗教のアピアランスが拡大しつつある現代社会において、宗教にどのような役割を期待し、認めているのだろうか、という点にある。現代の若年世代における宗教意識が私化したものであり、彼らにとって宗教が個人の内面的なもの、あるいは自己充足的なものに過ぎないならば、彼らが宗教に期待する役割もまた個人的なものとなり、宗教の社会参加については否定的な態度となることが予測される。

2 分析の手続き

上記の問題関心について、ISSP 宗教調査（2008）のデータ分析による検討を行う。宗教の「個人に関する役割への期待」を捉える諸指標としては「心の安らぎや幸福感が得られる」「友人を作る」「困難や悲しみを癒す」「良識を持った人と知り合う」、また「社会に関する役割への期待」を捉える諸指標としては「宗教団体の指導者による選挙への影響」「宗教団体の指導者による政府の決定への影響」をとりあげたい。分析にあたっては、①使用する質問項目間の関係を分析し、各指標の妥当性の検討を行う、②国際比較分析から、日本、韓国、台湾の3カ国をとりあげ、東アジアにおける先の分析結果の一般化可能性を検討する、③以上の分析結果を踏まえ、上述の諸指標について世代間比較を行う、といった仕方で進めていく。

3 分析の結果

まず指標の妥当性について述べるならば、日本、韓国、台湾のいずれにおいても、宗教の「個人に関する役割への期待」と「社会に関する役割への期待」については、それぞれの概念に対応する指標間の相関係数が高く、測定概念に対する指標の妥当性が支持された。日本においては「個人に関する役割への期待」と「社会に関する役割への期待」との間でわずかに正の相関関係が認められたが、韓国と台湾においては、負の相関関係が認められ、これら2つの期待が相互に独立であることを示唆している。

世代間の差異としては、日本では「個人に関する役割への期待」が世代交代によって低下している傾向が認められたが、韓国、台湾では世代間の差異は認められなかった。「社会に関する役割への期待」については、韓国や台湾では高齢世代が相対的に高い期待を有しており、日本においては1990年代以降に生まれた若年世代が相対的に高い期待を有しているという結果が示された。